

ねん がつ にち
2020年6月27日

ねんかんだいじゅうさんしゅじつ
年間第十三主日

きく ち いさおだい し きょう せつきょう
菊地功大司教 ミサ説教

きょうかいかつどう だんかいてき さいかい はじ いちしゅうかん す ぞん
教会活動の段階的な再開を始めてから一週間が過ぎました。ご存じのように、
いま かんせんしゃ まいにち ほうこく い ぜん かんぜん じょうたい あんしん
未だ感染者は毎日のように報告されており、以前のような完全な状態で安心
してミサなどを再開できる状況ではありません。まず第一に、まだ安全な
じょうきょう
状況ではないのだということを念頭に置いていただければと思います。

じょうきょう か おお ほう ひ せき
その状況下でも、なんとかひとりでも多くの方に秘跡にあずかっていただき
かんが さまざま せいやく なか さいかい
たいと考えて、様々な制約の中で、ミサなどを再開いたしました。とりわけ、
かんせん ば あい じゅうとく か こうれい いま
感染した場合に重篤化し、いのちのリスクがある高齢のみなさまには、まだ今
じたく とど ねが たいへんもう わけ おも
しばらく自宅に留まってくださるようお願いしており、大変申し訳なく思
れきし のこ じたい あらなみ なか さき すす たが
っています。歴史に残る事態の荒波の中を、先へと進んでいるわたしたちは、互
いにいのちを守るために、耐え忍びながら、支えあっていきたいと思ひます。

ほんじつ ふくいん じ ぶん じゅう じ か にな したが もの
本日の、マタイ福音は、「自分の十字架を担ってわたしに従わない者は、わ
たしにふさわしくない」という、しゅ ことば しる
主イエスの言葉を記しています。

じゅう じ か にな い みみ じょうきょう そうぞう
「十字架を担って生きていく」と耳にすると、どのような状況を想像され
るでしょう。くる せ お た のし い
苦しみを背負って耐え忍びながら、ひっそりと生きていくよう
なイメージでしょうか。かんせんしょう しゅうそく なか さまざま こんなん ちやくめん きょうかい
感染症が終息しない中で、様々な困難に直面し、教会
でも様々な制約を課されてしまった。じゅう じ か せ お た い
十字架を背負って耐えて生きていこう
よ ことば
と呼びかけている言葉でありましょうか。

おも
そうではないように、わたしは思ひます。

じゅう じ か おも に くる
そもそも、十字架とはいったいなんでしょう。重荷のことでしょうか。苦し
み じゅう じ か おも に くる み
みのことでしょうか。十字架が重荷や苦しみだけであるならば、それはどう見

でもマイナスのイメージでしかありません。しかしここでイエスが語る十字架は、主にふさわしいものとされるための十字架であり、すなわち神に良いものとして認められるための、前向きな存在であります。十字架とはいったいなんでしょう。

コリントの信徒への第一の手紙の 1 章 17 節に、パウロの言葉が記されています。

「なぜなら、キリストがわたしを遣わされたのは、洗礼を受けるためではなく、福音を告げ知らせるためであり、しかも、キリストの十字架がむなしなものになってしまわぬように、言葉の知恵によらないで告げ知らせるためだからです」

コリントの教会にあって、誰から洗礼を受けたのかということで派閥争いが起きたとき、パウロは、自らに与えられた使命は、「洗礼を受けるためではなく、福音を告げしらせる」ことなのだと宣言します。

もちろん、救いのために洗礼が必要であることは否定できませんが、洗礼よりも前に、まず大切なことがある。それはイエス・キリストの福音を告げることなのだと、パウロは宣言します。

くわ 加えてパウロは、「しかも」と続けます。「しかも、キリストの十字架がむなしなものとなってしまわぬように、言葉の知恵によらないで告げしらせるためだからです」

福音を、言葉の知恵に頼って告げていたのでは、キリストの十字架がむなしなものとなるということです。ここではじめて、パウロが語る十字架の意味が明らかになります。すなわち、言葉の知恵によらずに福音を告げしらせているのが、キリストの十字架そのものであります。

ことば ちえ ぐ たいてき め み こうどう
言葉の知恵によらないとは、具体的に目に見える行動をもつてのあかしが、
じゅうじか じゅうじか みずか そうぞう にんげん すく
十字架だということでありませす。十字架は、自らが創造された人間の救い
のため、かみ じしん あい じゅうまん せつきよくてき こうどう あい
のために、神ご自身がその愛といつくしみの充満として、積極的に行動した愛
のあかしであります。かみ じしん おこな あい
神ご自身の行いによる愛のあかしそのものが、十字架
じゅうじか おもに くる しょうちよう せつきよくてき あい こうどう しょうちよう
です。十字架は、重荷や苦しみの象徴ではなく、積極的な愛の行動の象徴
かみ み あい め み かたち とし
です。神の満ちあふれる愛といつくしみが、目に見える形となった時、イエ
すはじゅうじか みずか
スは十字架に自らかかり、そのいのちをいけにえとしておんちち
まえ む せつきよくてき あい
ました。これほど前向きで、積極的な、愛のあかしはありません。

きょうかい かみ に すがた そうぞう にんげん はじ お
教会は、神がその似姿として創造された人間のいのちは、その始まりから終
れいがい ぞんちよう まも く かえ しゅちよう
わりまで、例外なく尊重され護られなくてはならないと、繰り返し主張して
きました。

いま、いのちを守るためにせ かい れんたい
世界が連帯しようとするとき、せいじたいせい ちが
政治体制の違いや
けいざいてきりえき ついきゅう かべ の こ ゆうせん かち みなお き
経済的利益の追求などの壁を乗り越えて、優先すべき価値を見直すときに来
か
ていると感じます。

きょうこう にんげん そんげん まも い
教皇フランシスコは、人間のいのちの尊厳を守るために、そのいのちが生き
ち きゅうぜんたい まも たいせつ きょうちよう
ている地球全体を守ることの大切さを強調されています。

きょうこう がつ にち いの さい せんげん
教皇フランシスコは、5月24日のアレルヤの祈りの際に、このように宣言さ
れました。

「5月24日から来年（すなわち2021年）の5月24日までのこの一年間は、この
かいちよく かんが とくべつ とし
回勅（「ラウダート・シ」）について考える特別な年となります。わたしたち
く いえ ち きゅう よわ たち ば きょうだい し まい たいせつ
がともに暮らす家である地球と、もっとも弱い立場にある兄弟姉妹を大切に
ちから あ ぜん い ひと よ
するために力を合わせるよう、わたしはすべての善意の人に呼びかけます」

きょうこう かいちよく なか げんだいしゃかい してき
教皇はこの回勅「ラウダート・シ」の中で、現代社会についてこう指摘して
います。

げんざい せ かいじょうせい ふ あんてい き き かん あた しゅうだんてきり こしゅぎ おんしょう
「現在の世界情勢は、『不安定や危機感を与え、それが集団的利己主義の温床』
となります。人は、自己中心的にまた自己完結的になるとき、貪欲さを募ら
せませす。」(204)

きょうこう せ かい ひろ こじんしゅぎ り こしゅぎ こくふく あたら
教皇は、世界に広がりつつある個人主義や利己主義を克服するために、新し
いライフスタイルを生み出し、社会を変えていかななくてはならないと呼びか
けています。世界中で自粛生活が続いた今、わたしたちはライフスタイルを
見直すチャンスを与えられているようにも思います。

かみ さくひん ほ ごしゃ しょうめい い とく せいかつ か
「神の作品の保護者たれ、との召命を生きることは、徳のある生活には欠か
せないことであり、キリスト者としての経験にとっての任意の、あるいは副
次的な要素ではありません」(217)と教皇は呼びかけます。

あい じゅうじか みずか い かた ことば おこな
愛のあかしである十字架を、わたしたちは自らの生き方で、言葉で、行い
であかししていきたいと思えます。あかしして生きることこそ、十字架を担
って生きていくことです。そうすることで、神のふさわしいものとされるこ
とができます。神にふさわしいものは、当然、神が愛を込めて創造されたこ
の世界を大切にすることもあります。

ひつよう い みち む ひら
いま、わたしたちにとって必要な生きる道は、どこに向かって開かれている
のかを、信仰の目をもって見極めてまいりましょう。